

なる衣着て、うちつれて海水に浴す。たれもたれも、休息所にて借りたる蓑藁帽子のいと大きなるをいただける、其さまいとをかし。おのれもその一人なりしを、いまさら思へばはづかし。向には淡路島ほのかに見え、左には雑賀崎の突き出でたるけしきいはんかたなし。潮風に吹かれつゝ水にたゝずみ、浪の來るごとに立ち上りなどするこゝちよさ、筆につくすべくもあらず。深き所に水をちらして游泳するをのこあれば、いと淺き所に貝たづぬるをとめ子あり、おのがじゝ浴せるさまいとたのしげなり。さてあまり永きもよからねば、とて、十五分ばかりにしてくがに上り、休息所に入り、衣をかわかしてもとの舟に歸りたり。川をさかのぼりて家に歸りたるは、六時ごろなりしやうにおぼゆ。

この濱かの浦今は山川百里をへだてたり。海水浴の好時期なるきのふけふ、いかに多くの人のかしをさして行くらん。この濱の松風はいまもなほ浴客の心をや洗ふらん。かの浦の潮風はいまもなほ浴客の面をや吹き拂ふらん。あゝ海水浴あゝ荒濱あゝ和歌浦。

説林

女學生と浮華文學



人の心に、最強烈なる刺撃を與へるものゝ中で、一番に効力のあるは、感情が激發せる時に、

激動せる感情を謳つた文學を讀ませるに越したものは、恐らくあるまい。だから、若し其文學が、卑猥汚穢なる感情を發表せるものであると來た日には、之を讀む所の人の精神を汚瀆すること亦、最甚しいものである。

一體、戀といひ、愛と云ふもの、其本然の質に於ては、まことに純善純美なるものであらう。然し當今所謂文士と稱せらる人々の戀を謳つたもの、愛を説いたものが、果して其純善の本質を寫して居るであらうか、果して其純美の本質を畫いて居るであらうか、如何にも表面だけは、やれ神聖であるの、やれ天地間の美であるのと騒ぎ立て、居ることだけは、分つて居る。然しながら其實は、一様に野卑醜陋淫逸浮華とでも云ふべき男女間の痴態を演出してさうして表面だけは神聖とか

純美とかいふ名前を借り用ひて居る。此現象は近來の小説に於て最甚しいと思ふ。

人生の時季の中で、一番感情の發動し易い、一番好奇心の強く働らくのは、いふまでもなく、青年時季である、青年時代の男子にありては、一切前後の考とか分別とかもしないで、たゞ無暗に面白半分おももしろはんぶんに冒險をやつて見る。所で、青春時季の女子にありては、そう男子の様に無暗に冒險をやることは少ないが、併し其好奇心とか感情とか想像とかの熾盛なことは、同じことである、たゞ男子の様に、ザツバに外に顯すことのない丈夫れ丈夫な熾盛である。これ等の所謂未發の感情といふものは、人間品性の最大要素を形成して居るのであるから、若善良の方向に導かる、時は、無論、宜しのであるが、不幸にして不良の方向に養成せら

る、時は、其結果は誠に悲しむべきことになるのは明である。

所謂、當今の文士と稱する輩が、神聖純美など云ふ麗々しき看板の下に淫逸浮華なる男女間の痴態を演出せる歌詩小説一言すれば浮佻卑猥の感情を表出したる文學は、此時代の精神に最も入り易く、彼の未發の感情に最も強烈なる刺撃を與へるものである。燃ゆるが如き感情を巧に寫實せる文學は、感情の熾盛なる精神には、頗る適合するものである。之に依りて未發の感情は益々熾盛となり、遂には趣味好尚を没却せられ、判斷理性の力も失滅し、之等の文學が寫し出せる事實の中に、自分の身を置いて見、結局は、遂に其實實を實際に演出して見ようと云ふ氣になる。是に至ると、もはや其女性は精神的に死んで仕舞つたものと

六十八
である。不良文學が人を殺すことは。鋭い刃を以て斬殺するよりも甚しい。及で殺された身は、未來に行つて靈性的に生活することも出來ようが、精神的に死んでしまつてはもう夫つきり未來永劫浮むせがないのである。

汚瀆野卑一讀嘔吐を催す様な文學が、現今頻々として出版せられる。かの吾人の同胞と云ふも耻づかしき賣女醜婦の寫眞を挿んでる小説の如きは、もとより論ずるまでもないが、其歡迎のされ様といつたらまことにひどい。又かの極めて優美な體裁で、便利な形體に出來てる所謂袖珍文學の中にも、或は若き血燃ゆると謳ひ、我が戀ふる君と叫び、戀の涙と恨み、優しの心と狂へる文字を以つて、全紙を埋めたものが、春の笥かなんかの様に、近來どこからもこゝからも、片々として

顯れる。ただ夫が幾らか詩的に出来て居て、然も體裁も優美に出来ている所から、一般の女學生徒は争うて之を購ひ然も公然女學校あたりでも、之を讀して居る。これが教養の任に當れる人々も、之を咎むることをしない。演劇や寄席に遊ぶとは無論危険に違はないが、精神を毒する結果に至つては、演劇寄席と殆ど軒輊がなと思はれる。

今日の世の中、我國民は上から下に至るまで、舉つて高尚な趣味好尚を滅却し、舉世滔々として、殆んど混濁の衢に沈溺せんとしつゝ、あるのである。此時に當りて、國民の趣味を養ひ其好尚を高くし、以て將來國民の品格を純良ならしめるには、どうしても未來の母たる今日の女學生に待たなければならぬ。然るに今日の文學社會が、世間に向つて供給する所の文學は、右述べた如きも

ので一般の家庭は舉つて、之を歡迎し、多數の女學生は相率ゐて、この不良文學の中に沈溺し、以つて其高潔玉の如く、純美花に似たる清淨の心情を汚濁し終りつゝある。國民道德の消長は、古來何處の國で見ても、皆其國の婦人の状態に依つて定まるのである。然して未來の母たるべき今の女學生の嗜好が、右述べた様な文學で養成せられつゝあるを思へば、我國將來の運命といふものは、まことに案じられるといはんければならぬ。

(完)

